県立高遠高等学校教員住宅
建設のための用地造成事業

後　沢　遺　跡　II

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1996.3

高遠町教育委員会

県立高遠高等学校教員住宅
建設のための用地造成事業

後　沢　遺　跡　II

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1996.3

高遠町教育委員会

後沢遺跡を望む（中央の谷口部が調査地）

発刊にあたって

今回、県立高遠高等学校教員住宅建設のための造成事業にあたり、発掘調査を行なった高遠町大字小原760－1番地は、高遠町を東西に流れる三峰川の南にそびえる、三界山（みつかいやま）を流れ下る大沢川（後沢）によって造られた、扇状地の扇頂にあたる部分に位置し、この場所は後沢遺跡の範囲内にあります。

この小原後沢周辺は、古代より今日に至るまで人々が営々として生活の拠点としてきた場所で、三峰川の段丘上を西に北垣外、竹垣外、上垣外などの遺跡と広範囲につながる重要な遺跡の一つであります。

これらの遺跡のある河南地区（旧河南村）は、昭和32年に多くの目的をもって建設された美和ダムの完成などにより、農地への用水の供給が容易になったため、土地改良事業が早くから行なわれた地域であり、この広大な遺跡群は、近世のかく乱により、遺構などはほとんど残っていないと考えられている地区であります。

今回の調査は、平成4年に行われた小・中学校教員住宅等建設のための河南小学校跡地調査に続き二回目となり、調査地はこのすぐ南側の水田一枚250m²の範囲であり、調査は3本のトレンチにより試掘を行ない、調査の結果3ケ所の竪穴址を発見し、その一つから縄文時代早期の押し形紋土器の破片と、縄文中期後葉に比定することができる、ほぼ完全に近い形の土器が2点出土しました。

この調査にあたり、お忙しいところをご努力いただいた調査員の友野良一先生をはじめ、積極的に調査に参加していただきました作業員の皆さん、また、ご協力いただきました方々に心より感謝申し上げるとともに、この報告書が今後の教育文化の向上と、埋蔵文化財の一層の保護のために活用されることを願い、発刊にあたっての言葉といたします。

平成8年3月

高遠町教育委員会

教育長　山川　廣

例　　言

1．本報告書は平成６年度に実施した、後沢遺跡内の県立高遠高等学校教員住宅造成事業に伴う緊急発掘調査報告書である。

2．この緊急発掘調査は、高遠町役場の委託により高遠町教育委員会が実施した。

3．本報告書は、平成７年度中にまとめることが要求されているため、調査によって検出された遺構・遺物を、より多く図示・図版化することに重点をおき、資料の再検討は後日の機会に譲ることとした。

4．本報告書の執筆者及び図版制作者は次のとおりである。

○本文執筆者　　友野　良一・小松　博康・矢沢　　實
○図版製作者　　友野　良一・小松　博康・丸山まゆみ
○写真撮影　　友野　良一・加藤　俊幸・小松　博康
○遺物整理　　友野　良一・小松　博康・丸山まゆみ・奥田　静子

5．本報告書の編集は、主として高遠町教育委員会がおこなった。

6．遺物及び実測図類は、高遠町教育委員会が保管している。

目　　次

口　　絵
発刊にあたって
例　　言
目　　次
挿 図 目 次
図 版 目 次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯 …… 1
　第1節　発掘調査に至るまでの経過 …… 1
　第2節　調査会の組織 …… 1
　第3節　発掘調査の経過 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の環境 …… 4
　第1節　遺跡の位置 …… 4
　第2節　地形・地質及び周辺の遺跡分布 …… 5
　第3節　歴史的環境 …… 7

第Ⅲ章　遺構と遺物 …… 10
　第1節　調査の概要 …… 10
　第2節　遺構と遺物 …… 10

ま と め …… 18

あ と が き …… 19

参 考 文 献 …… 19

写 真 図 版 …… 20

挿　図　目　次

第１図　後沢遺跡の位置図 …… 4
第２図　後沢遺跡周辺の地形及び遺跡分布図 …… 5
第３図　後沢遺跡周辺の地質概界図 …… 6
第４図　発掘調査箇所位置図並びに周辺の地字図 …… 9
第５図　発掘調査状況平面実測図 …… 11
第６図　調査出土遺構平面実測図 …… 13
第７図　調査出土遺構断面実測図 …… 14
第８図　調査出土遺物実測図(1) …… 16
第９図　調査出土遺物実測図(2) …… 17

図　版　目　次

図版１　発掘調査状況(1) …… 22
図版２　発掘調査状況(2) …… 23
図版３　トレンチ調査出土土坑調査状況 …… 24
図版４　再調査中の状況並びに遺構出土状況 …… 25
図版５　遺構出土状況 …… 26
図版６　遺構出土状況他 …… 27
図版７　調査出土遺物(1) …… 28
図版８　調査出土遺物(2) …… 29
図版９　分布調査採取遺物 ……

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至るまでの経過

平成６年10月31日　後沢遺跡発掘調査にかかわる届出等を提出。

10月　調査団長友野良一氏と調査概要の事前打ち合わせを行なう。

11月15日　長野県教育委員会より工事に先立ち発掘調査を実施すること。また、調査にあたっては高遠町教育委員会が行なうこと。などの指示を受ける。

第２節　調査会の組織

○高遠町教育委員会

教育委員会	北原作英	
委員長代理	横田　稚	
委員	中畑節子	
〃	阪下哲彦	
教育長	山川　廣	
教育次長	田中幸人	(平成７年３月31日まで)
社会教育係長	加藤俊幸	(平成７年３月31日まで)
係	小松博康	(平成７年３月31日まで)
〃	丸山まゆみ	(平成７年３月31日まで)

○発掘担当者・調査員

友野良一（日本考古学協会会員・東洋陶磁学会会員）

第３節　発掘調査の経過

〔月・日〕　　調　査　日　誌

1994年

11・14(月)

テントの設営、資材搬入、トレンチの位置測量、レベル確認などの作業を行なう。東西に長い水田であるので、まず、５cm間隔で３本のトレンチを設定することとし、南側から第１トレンチ、中央を第２トレンチ、北側を第３トレンチとした。Ｂ.Ｍ.（Ｈ＝773.79m）を設定する。(作業員６名)

11・15(火)

あいさつと調査方法の説明の後、周囲の起伏状況から、開田の際土を切り取り、遺構の状態が確認しやすいと思われる第２トレンチ東側から、重機で表土剝ぎの後調査を開始する。地表から15～20cmが耕土であり、その下は後沢（大沢川）によって堆積されたと思われる砂とレキの混じった層で、後沢寄りの西に調査が進むほど深く、第２トレンチと第３トレンチの中央付近には土坑らしき部分が見られる。第２トレンチの土坑から縄文早期に比定できると思われる押型紋の土器片を発見。これらの土坑について、第２トレンチに確認されたものを第１号土坑とし、第３トレンチに出土したものを第２、第３号土坑とした。

平面測量、断面の一部測量と写真撮影を行なう。（作業員12名）

11・16(水)

昨日と同様に調査を続ける。第２、第３トレンチの土坑について細調査を行なう。第２トレンチの第１号土坑はトレンチ北側につながっており、直径約1.5m程度の変形の円形で、深さは表土から１m25cmで、壁は底からほぼ垂直に立ち上がっている。その西側約１m離れてピットNo.１を確認。直経約40cm程の楕円形で、テフラ層から20cmの深さである。第３トレンチには、第２トレンチのピットNo.１の北の位置に第２号土坑がある。直径約1.2m程度の変形の円形で、トレンチの北、南の壁につながっている。深さは表土から約1.1m、壁は第１号土坑と同じく底からほぼ垂直に立ち上がっている。その西側約80cm離れてピットNo.２がある。トレンチ北側の壁につながっており、テフラ層から23cmの深さで掘り込まれた直径30～40cmの楕円形であると思われる。このピットNo.２からさらに西へ約80cm離れた位置に第３号土坑がある。この土坑も壁面は垂直に落ち込み、北側の壁は更につながっていると思われる。水田面から1.4mの深さで掘り込まれ、南側の表土から85cmの所に焼け土部分が見られた。この土坑の直径は約1.7mで、土坑内の底に近い部分からは縄文土器片が27個ほぼ同じ層からまとまって出

土した。

本日までで試掘トレンチから得られた遺構は以上である。

土坑を含め、断面調査並びに写真撮影を行なう。今後調査員の都合がつかないので、発見できた土坑の最終確認作業は後日行なうこととし、位置の確認杭を入れ、危険防止のため一旦埋め戻してトレンチ調査を終了とする。(作業員13名)

11・17(木)

全体平面測量とレベル測量を行ない、機材を片付ける。(作業員6名)

1995年

1・26(木)

出土した土坑の再調査を実施する。土坑、ピットなど集中して出土した第2・3トレンチの、27m付近から幅約6mで、西側へ7m程表土を剥ぎ、調査を再開する。第2・3トレンチで出土した、3ケ所の土坑とピット以外の遺構は発見できなかったが、トレンチの壁で確認できなかった部分の全様をつかんだ。土坑は以降竪穴址とし、予想通りのほぼ楕円形であった。

第1号竪穴址から曽利式と見られる土器がほぼ完全な状態で出土した。表土下約60cmで口縁部が東を向き横に寝た格好をしており、土器内には黒褐色の土が詰まっていた。この下には覆いかぶさるように、同時期に比定できると思われる土器が表土から約80cmの所にもう一固体出土し、その他に数個の土器片を確認した。

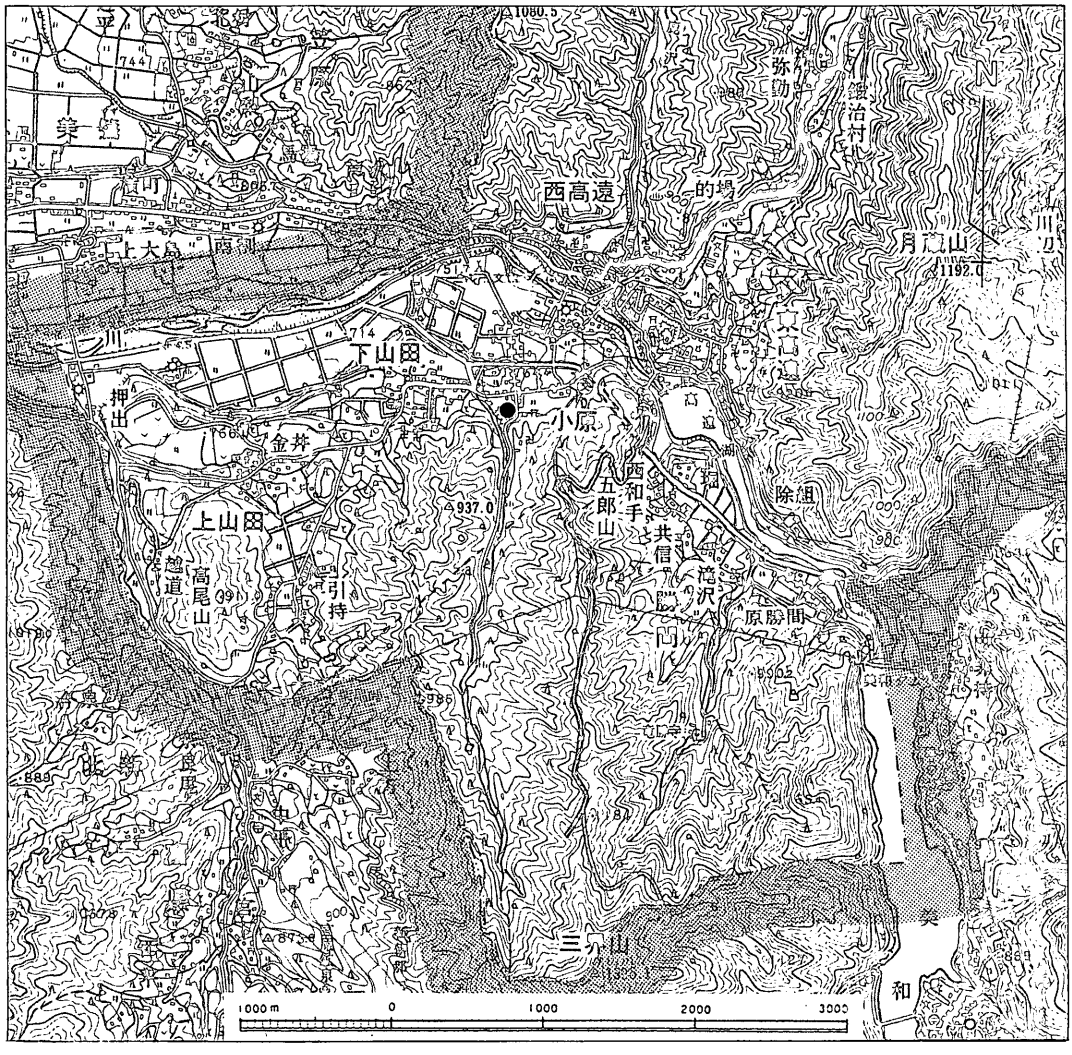
遺構面の平断面測量と写真撮影をし、すべての調査を終了する。(作業員7名)

第II章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置

遺跡の調査地は、高遠町河南地区小原後沢周辺である。この場所は、高遠町役場から南西へ約２kmの地点にあたる。今回の発掘調査地である高遠町大字小原760－１番地周辺は、赤石山脈仙丈岳に源を発する三峰川の南、三界山を流れ下る大沢川によって造られた、扇状地の扇頂にあたる部分に位置し、三峰川左岸の高位の段丘上に開けた集落で、三峰川の現河床より60～80ｍも高い平坦な台地上にある。

この小原後沢周辺は、標高770ｍを越える。



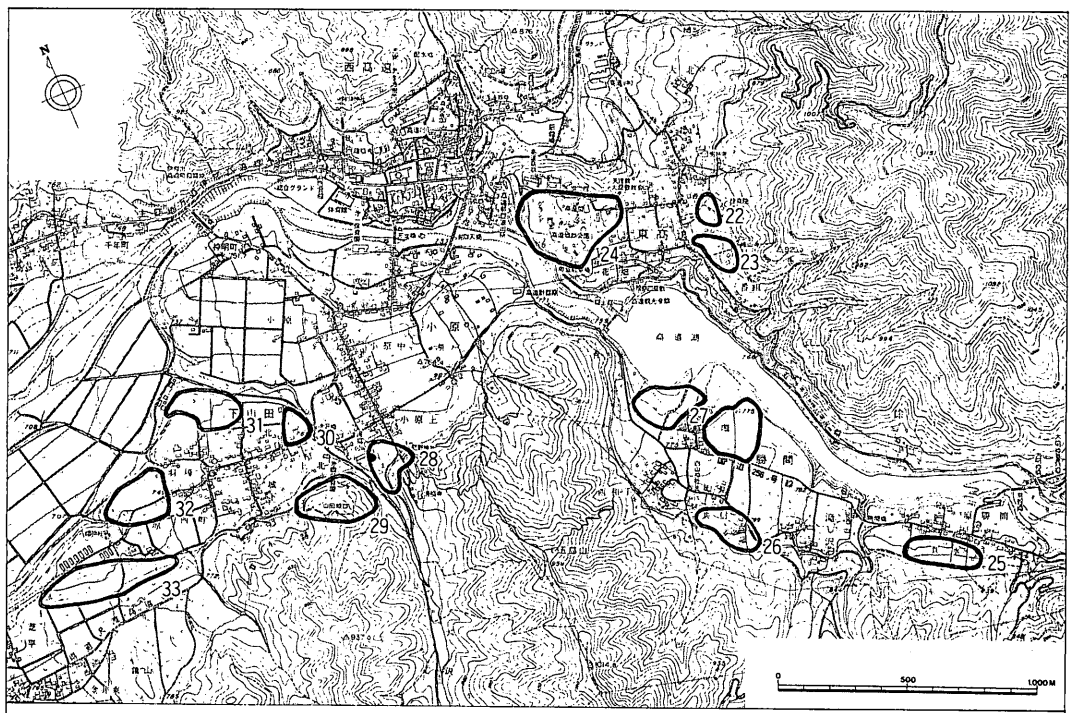
第１図　後沢遺跡の位置図

第２節　地形・地質及び周辺の遺跡分布

高遠町は中央構造線に沿う細長い縦谷で、南部を西流する三峰川に、藤沢川、山室川などの支流が合流して、河南地区の白山と鉾持桟道部分で伊那山脈に横谷をうかがっている。また、西日本の内帯と外帯の接触するところであって、圧砕帯も細長く続き、伊那山脈の地塊が赤石山脈に向かって衝きあげ断層したと見られ、谷の西側、つまり伊那山脈の側は、赤石山脈の側にくらべると急傾斜となっている。

小原後沢地籍の段丘は、岩盤の上に洪積期の砂礫層があり、さらにその上に厚い火山灰土が堆積してできており、三界山から流れる大沢川によって造られた扇状地で、ゆるやかに小原の段丘を覆った台地である。

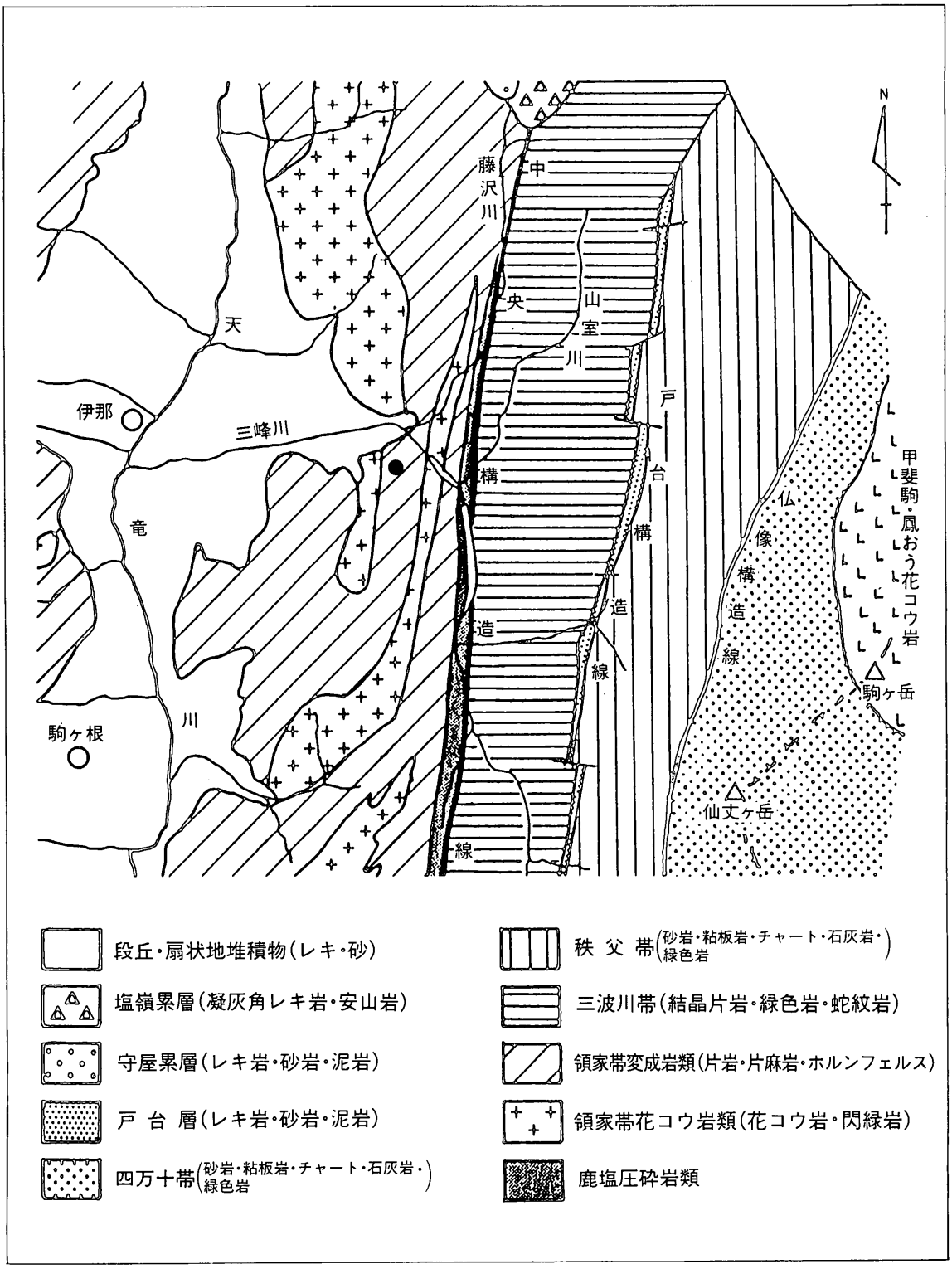
この後沢遺跡周辺には、古城、北垣外、竹垣外、上垣外等多くの遺跡が存在し、それぞれの遺跡から縄文・弥生・古墳時代の石器や土器が検出されている遺物の包蔵地である。



遺跡名			
22. 桂泉寺	23. 花　畑	24. 高遠城跡	25. 原勝閣
26. 西勝間	27. 堀	㉘ 後　沢	29. 古　城
30. 上垣外	31. 北垣外	32. 竹 垣 外	33. 八幡原

●今回の調査地

第２図　後沢遺跡周辺の地形及び遺跡分布図



第3図　後沢遺跡周辺付近の地質概界図　　○今回の調査地

第３節　歴史的環境

小原・山田地籍は、北緯35度49分、東経138度３分、標高770m前後の位置にあり、伊那市街の東約10km、高遠城下の南に三峰川を挟み対岸にある(第１・２図)。

南アルプスにその源流を発する三峰川が、長谷村・高遠町と経由し北西に流れ下り、杖突峠から南に流れ下る藤沢川が、これに合流して盆地を形成している。小原・山田の段丘は、岩盤の上に三峰川が作った洪積期の砂礫層があり、さらにその上に厚い粘土層・火山灰土が堆積してできている。

今回の調査地である小原後沢は、三界山から流れる大沢川によって作られた扇状地で、ゆるやかに小原の段丘を覆った沖積層台地である。

大沢川は、さらにこの段丘を開析(かいせき)し、三峰川に合流するまでの間、西に下山田、東に小原と地区の境をなしている。大沢川はいくつかの谷水を合流しており、水量豊かで干魃にも枯れることなく、今では高遠町の上水道、灌漑用水として大事な水資源である。

この流れによって作られた扇状地は肥沃で気候温和、山ふところ深く、狩猟、木材、山菜などの生活に必要な資源に恵まれていたので、太古より人間の居住地であったことが想像される。

現在の小原集落より南の後沢上流の山峡の地に田畑がみられる。さらに上流の平坦な山林内に住居・農地らしき跡があり、山際には数基の墓石を見ることができる。その地を現在も古屋敷（第４図）と呼ぶが、この地に居住していた十数戸の人々は江戸時代末期に北に移住し、現在の小原地区の集落に発展したといわれる。

伝説によると、源平の戦いに敗れた平維盛(これもり)が熊野から落ちてきて、山伝いに大沢の山谷を下り難儀をしたが、折よく付近にいたこの地に住む、ある杣人(そまびと)に助けられた。そのため維盛は、熊野社勧請の節に鉞(よき)を寄進され、それが神社に伝わっていたと小原村の口碑伝説として残っている。今も大沢川の中程に「よきとぎ」の地名があり、そこに架けられた橋を「よきとぎ橋」と呼んでいる。

後沢周辺には、古(ふる)城、北垣外、竹垣外、上垣外等（第２図）多くの遺跡が点在し、それぞれの遺跡から縄文中期（4000年前）後期（3000年前）弥生（2000年前）古墳時代（1700～1300年前）の石器や土器が検出されている。

○後沢遺跡

三界山を源流として小原と山田の境界を縦断する大沢川（後沢）右岸の段丘上に沿って展開する遺跡で、小原旧河南小学校から神明へと連なる縄文中・後期から弥生中期にかけての遺物の包蔵地である。

○古城・竹垣外・北垣外・上垣外遺跡

この四つの遺跡は大沢川左岸にあり、後沢遺跡との距離・標高が等しく、検出石器・土器などが類似しているという点から同時代の遺跡群と推測される。

○小原村について

古代（古墳～平安時代）中世代（鎌倉～戦国時代）の古記録や口碑・伝承などは存在しないので、これらの時代については不明であるが、古い文献として「吾妻鏡」に次のように記されている。

「小原は安元の頃(1175～1177)小松原郷ともいう、伊勢の御領たり、御炊夫爲に住す。今神明社その地なり、のち文治の頃(1185～1190)諏訪上下の社領たり、今諏訪地として在せり」安元は平安時代、平清盛の頃で、その頃小原は小松原郷ともいわれていた。伊勢の神領であって、御炊大夫（神官）が今の神明の地に住んだ、その後諏訪の社領となり、今諏訪地として存在す。この諏訪地の地名は今日も松ノ木原の一角に残っている。

明徳年間（1390～1394）小原大輔が始めて小原に城を築いたと言われている、いわゆる小原城で南北朝末期である。近隣の山田には山田氏が、高遠には高遠氏が、それぞれの地に城を構築している。ともにその地方を支配した豪族であった。

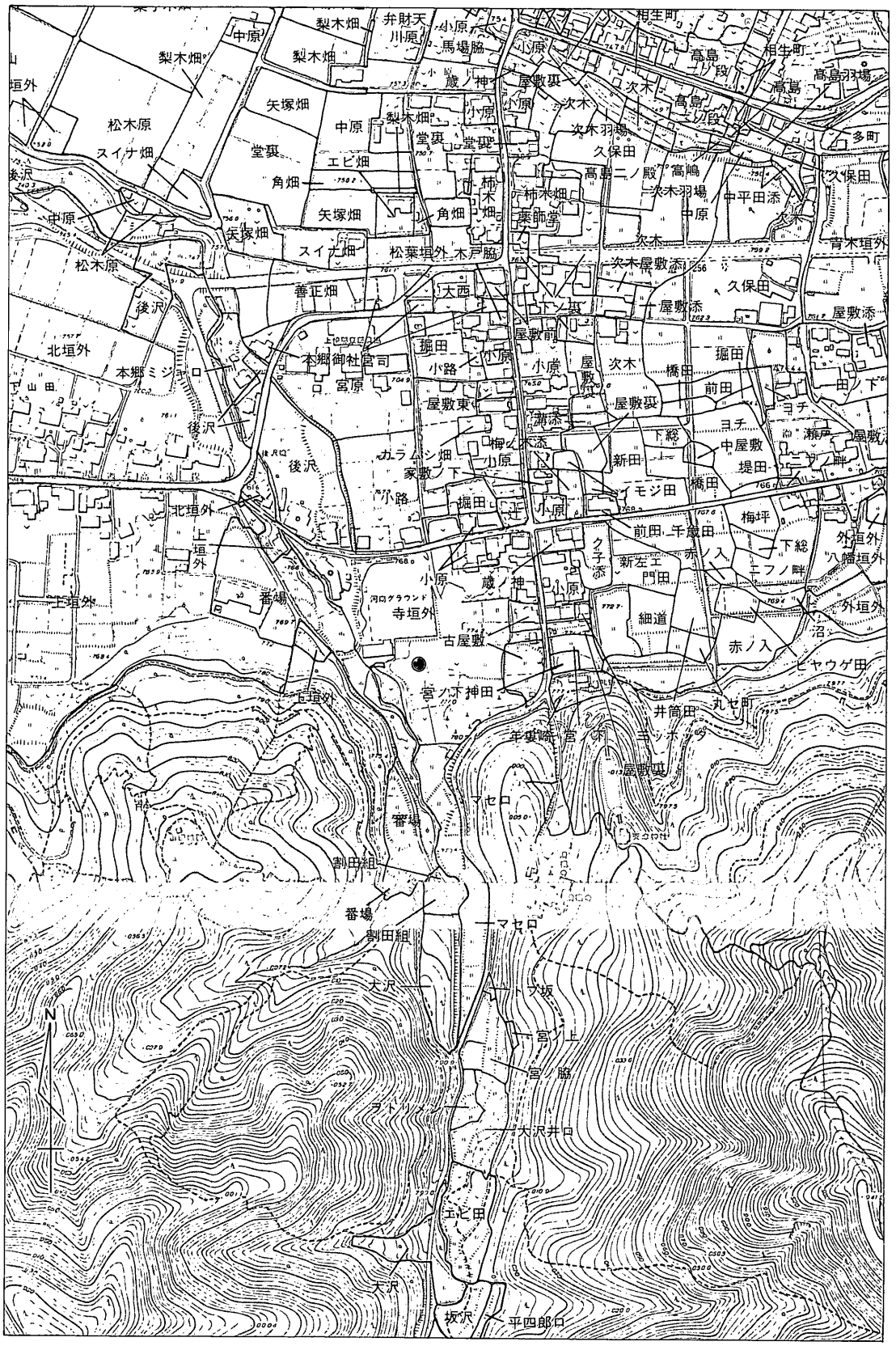
城は規模の小さい山城または平山城であった。高遠氏はその地方豪族を支配し、七代200年続いた。高遠頼継は諏訪に侵略をはかったが、武田信玄の軍と安国寺の戦で敗れた。

小原氏も一時高遠氏の配下となったことがあったが、やがて武田方となって、各地の戦いに参加し戦功をたてた。

その後徳川時代に保科正之最上移封の折り、小原氏一族の多くが正之にお供し移住した、その末裔に小原庄助なる者あり。

大沢川上流山峡右岸に田畑があり、更に上流にやや開けた地がある。そこを古屋敷と呼んで、現在は山林となっているが、明らかに居住跡として畑地、墓地らしき跡が確認できる、今山林内に墓石が残っている。

いずれにせよ小原地区は縄文、弥生時代より今日に至るまで、営々と人々が居住した歴史が残っている。（矢沢　實）



第４図　発掘調査箇所位置図並びに周辺の地字図　　●今回の調査地

第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　調査の概要

今回の緊急発掘調査は、県立高遠高等学校教員住宅建設のための用地造成事業にあたっての調査である。調査地は、高遠町大字小原760－１番地の水田１枚250m²が対象であり、この事業により遺跡が消滅するので、事前に発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図ることを目的とした。

この調査地はすぐ西側を流れる後沢（大沢川）を利用し、古くから開田がなされた場所で、昭和の中頃に所有者が２枚であったものを１枚に合併改良し、耕作していたとのことである。

調査は、平成６年11月15日から平成７年１月26日までの実質４日間を費やして実施され、東西に幅約１m延長およそ45mのトレンチ３本を、東側を起点として入れ、試掘調査を行ないながら遺構が確認された範囲を再調査した。トレンチによる試掘調査の範囲は約90m²であり、再調査が実施された範囲は約35m²であった。

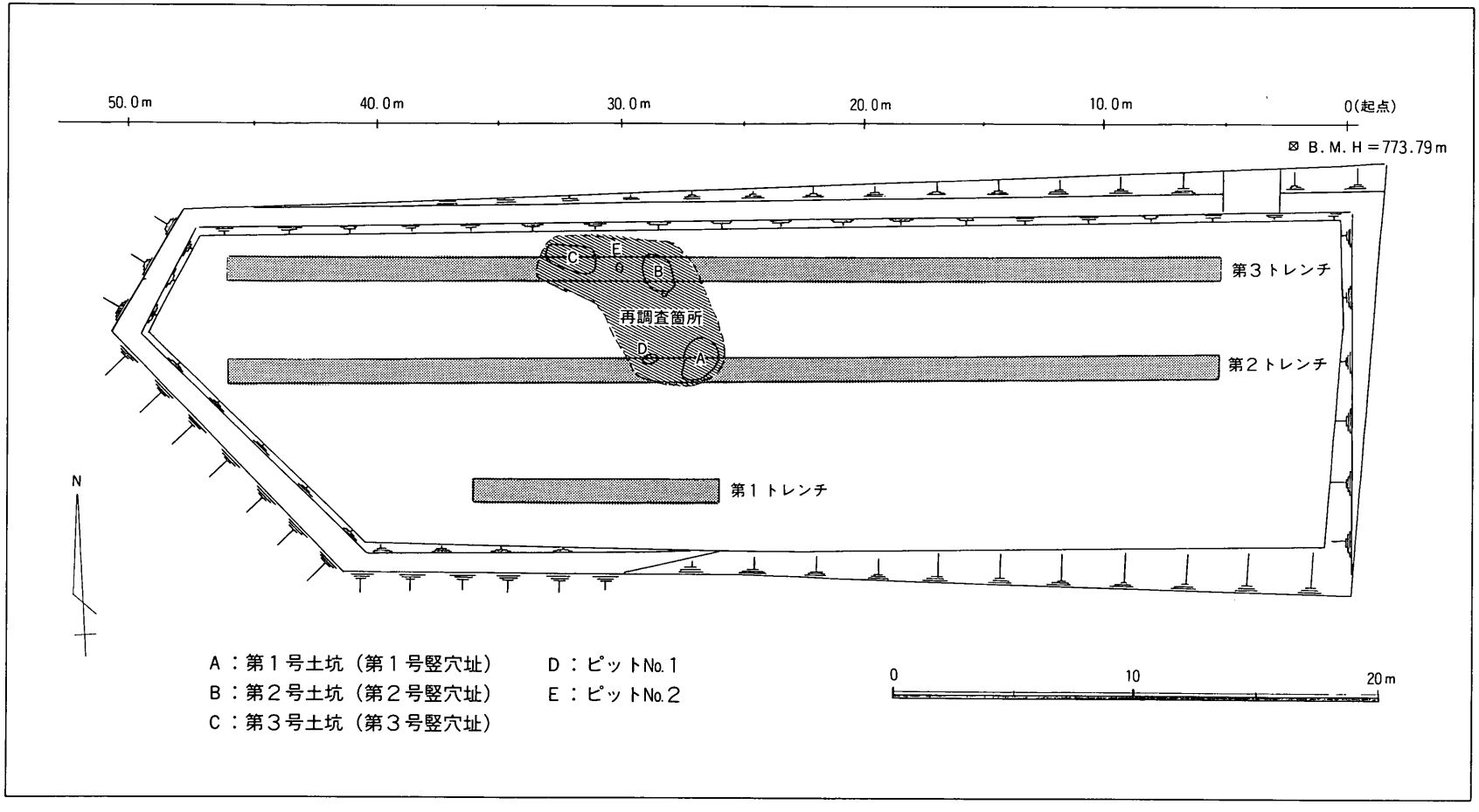
調査の進行状況並びに調査方法などについては、第Ⅰ章の中で報告しているので参照されたい。

第２節　遺構と遺物

①遺　構

本遺跡の調査は、最初にトレンチによる試掘調査を実施し、その結果により発掘個所を選定する調査方法をとった。試掘調査の結果から、第１号トレンチでは、遺構らしき個所を発見できなかった。第２号トレンチでは第１号土坑（仮称）並びにピットNo.１を確認した。第３号トレンチでは、第２号土坑並びに第３号土坑（仮称）とピットNo.２を検出することが出来た。

以上の結果から、本調査を実施したところ、第１号土坑は東西1.4m・南北1.8mの不正楕円形の竪穴式遺構となった。この深さは現水田面から１m25cmを測る遺構である。第２号土坑は東西1.3m・南北1.4mの不正円形で、深さは水田面から1.1mの竪穴式遺構となった。第３号土坑は、第２号竪穴の西側に発見された遺構で、東西2.0m・南北1.0mの深さ、地表面から1.4mを測る竪穴式遺構となった。



第５図　発掘調査状況平面実測図

第１号竪穴址（土坑）（第５～７図、図版３－１、４－３、５－１）

第２トレンチの26.5m付近に検出された第１号竪穴址は、トレンチ北側につながっており、直径東西1.4m・南北1.8mの変形の楕円形で、竪穴址深さは表土から１m25cm、テフラ無為層から約60cmで、壁は底から垂直に立ち上がっている。

今回の調査により、この遺構内から縄文早期の山形押型紋の土器片（第９図－10、図版６－３、８－１）２点と、加曽利Ｅ式の２点の土器（第８図、図版６－１．７）が出土している。

第２号竪穴址（土坑）（第５～７図、図版３－２、４－３、５－２）

第２号竪穴址は、第３トレンチの起点から28mの所に確認された遺構である。直径東西1.3m・南北1.4mの変形の円形で、トレンチの北、南の壁につながっていた。深さは表土から1.1m、テフラ無為層から約60cmで、壁は第１号土坑と同じく底からほぼ垂直に立ち上がっている。

第３号竪穴址（土坑）（第５～７図、図版３－３、４－３、５－３）

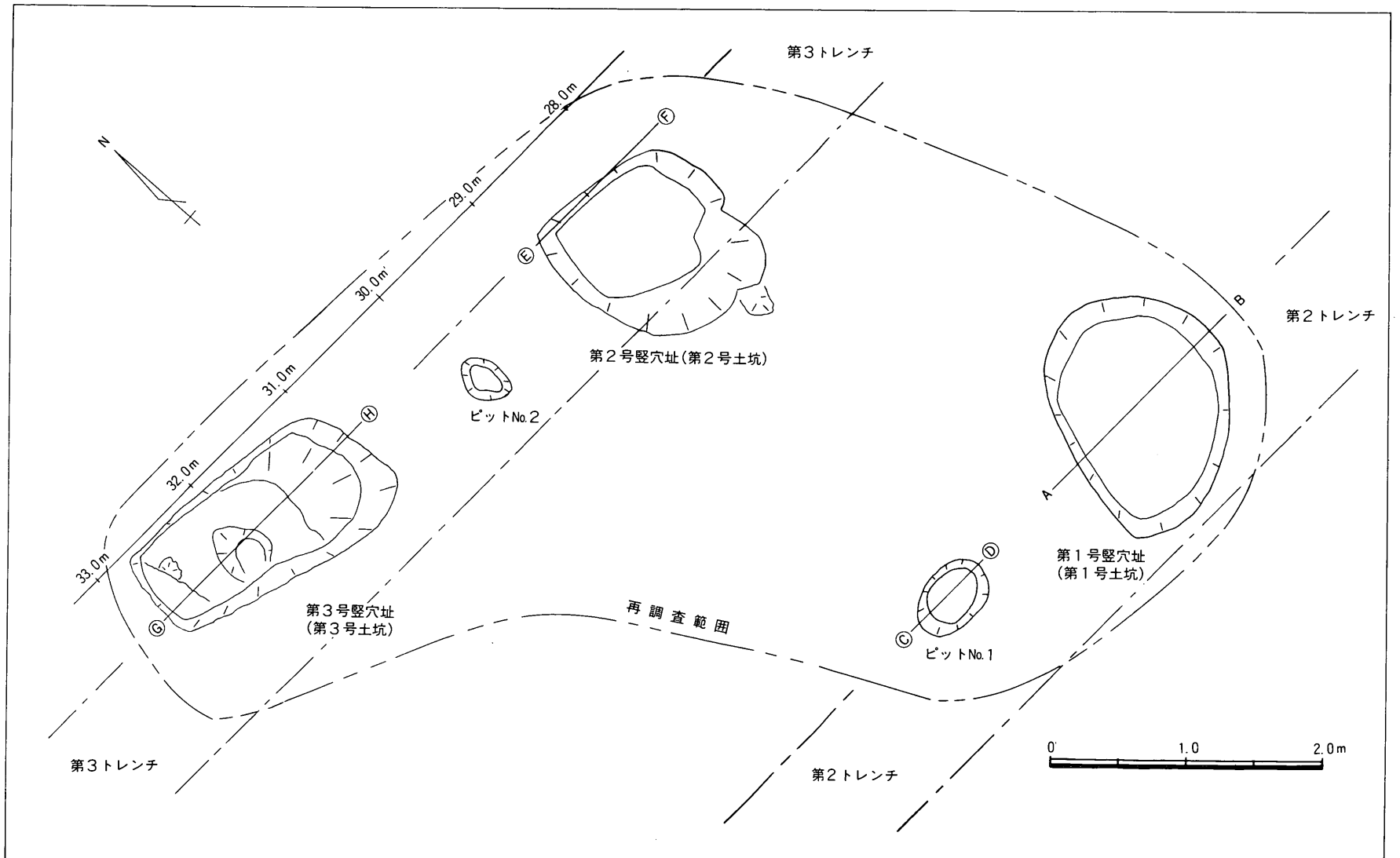
第３号竪穴址は、第３トレンチに確認されたもので、起点から32m地点で、壁面は垂直に落ち込み、北側の壁は更につながっていた。テフラ層から70cmの深さで掘り込まれ、水田面からは約1.4mの深さであった。南側部分の表土から85cm下がった所に、焼け土部分が見られた。この竪穴址は東西2.0m・南北1.0mの長方形に近い楕円形で、土坑内の底に近い部分からは縄文土器片が27個（遺物番号No.35　第９図、図版９－１）ほぼまとまって出土した。

ピットNo.１（第５～７図）

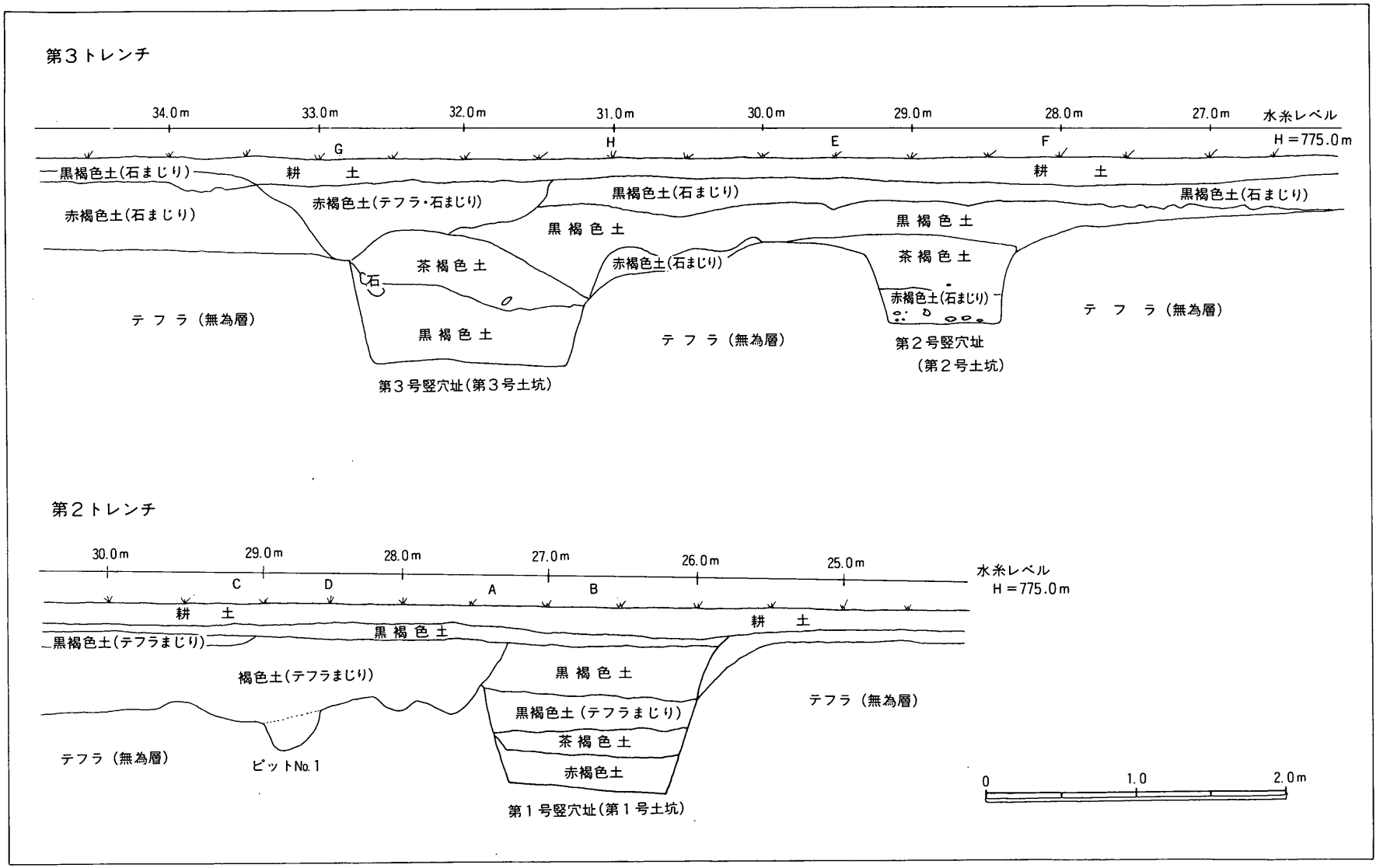
ピットNo.１は、第２トレンチの起点から28.5mの地点に検出された遺構である。東西に60cm、南北に50cmの楕円形で、水田面からの深さ1.1m、テフラ層から20cmの深さで、テフラ層が東から西に傾いて掘り下げられている。

ピットNo.２（第５～７図）

ピットNo.２は、第３トレンチの起点から30mの地点に検出された遺構である。テフラ層から約23cmの深さで掘り込まれた、東西に40cm、南北に30cmの楕円形であった。



第6図　調査出土遺構　平面実測図



第７図　調査出土遺構断面実測図（トレンチ調査断面から）

②遺物（第89図、図版６～９）

第２号トレンチの中程に確認された第１号竪穴址から、縄文早期の山形押型紋土器片（第９図－10、図版６－３、８－１）が砂利層から発見された。この押型紋は細久保式と考えられる土器と位置付けた。

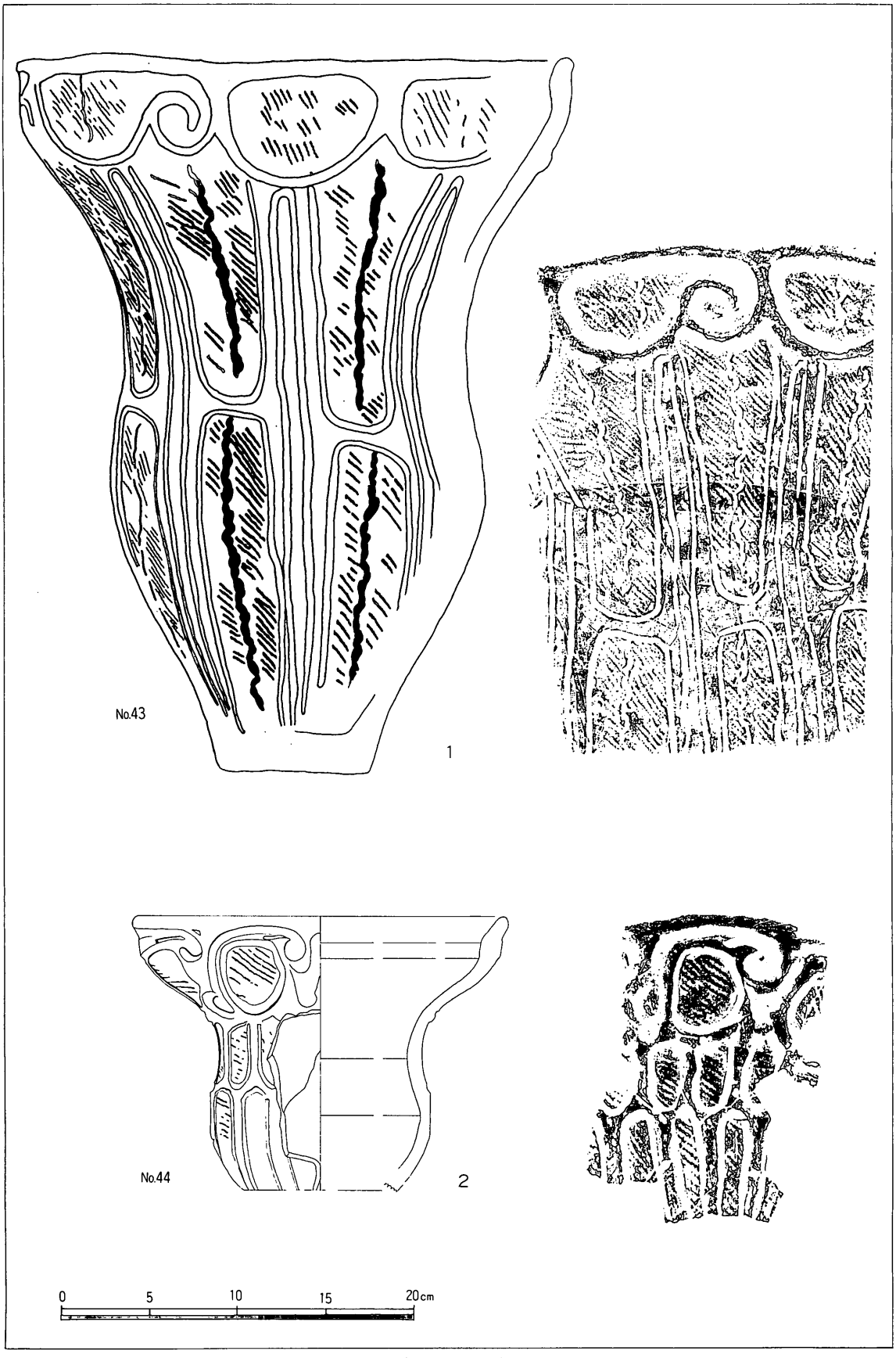
同じく第１号竪穴址から再調査により出土した、土器No.43（第８図－１、図版７－１）は口縁部に区画文がされ、頸部から底部にかけてふくら味をもつ深鉢型の土器で、その紋様は地紋に縄紋と縦に引かれた波線紋が施されている。加曽利Ｅ式のⅢ型式に比定される。

また、上記土器の直下には口縁部に唐草紋の隆帯紋で飾られ、内側に煮こぼれ跡と思われる炭化物が付着した、深鉢型の土器No.44（第８図－２、図版７－２）が検出された。この土器は、加曽利Ｅ式のⅣ型式に類する土器と考えられる。

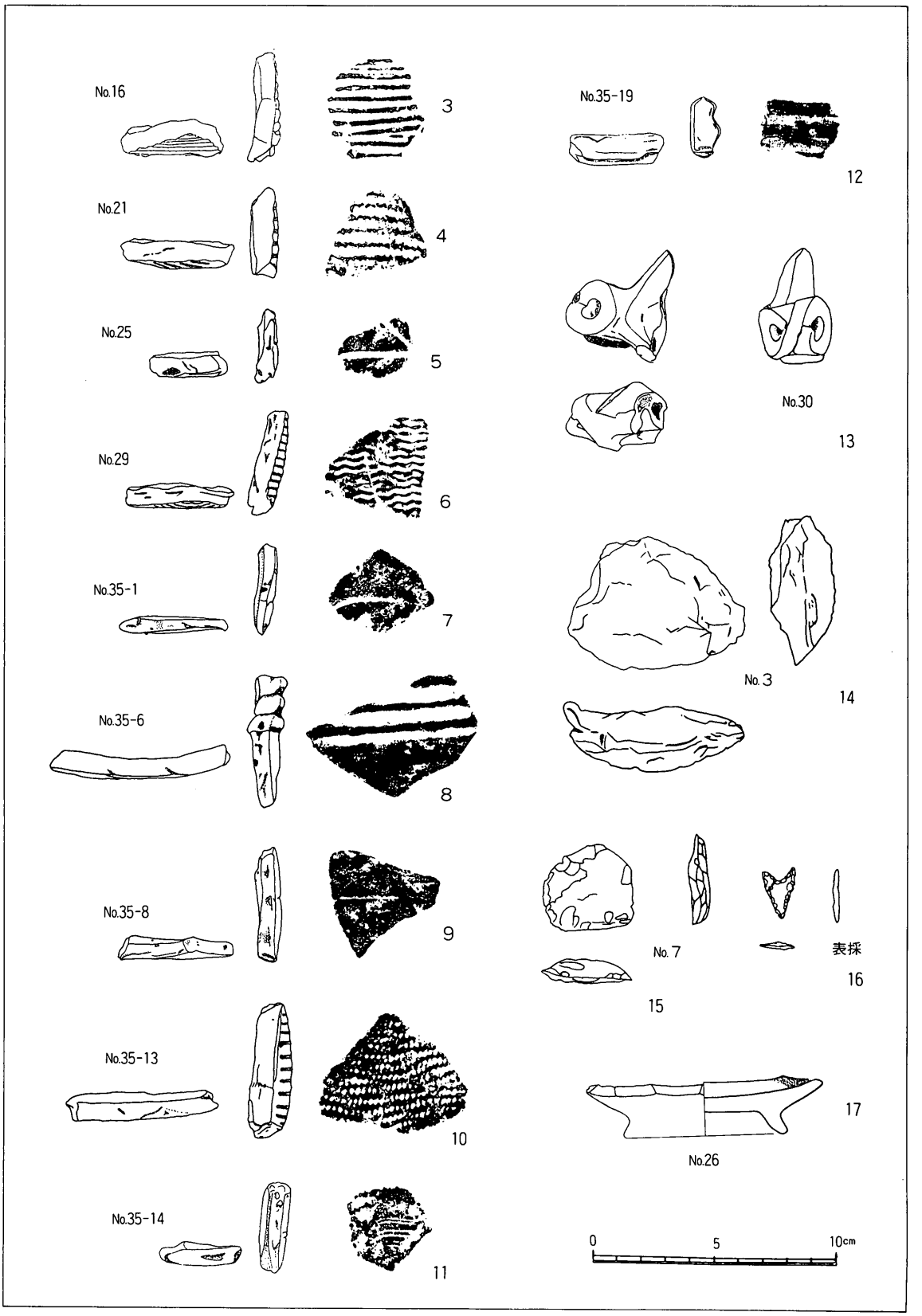
第２号竪穴址及び第３号竪穴址からは、縄文中期後葉の曽利Ⅱ～Ⅳ型式No.35－１外25点を検出し、なかでは、縄文後期掘之内式土器No.35－８（第９図－９）を１点。弥生式後期の中島式と考えられる土器片No.35－14（第９図－11）１点が検出された。また、出土番号No.26(第９図－17、図版６－２、８－３．４）は、平安時代の灰釉陶器で、折戸窯第２段と考えられる遺物である。

表彩では、明治、大正、昭和の陶磁器の破片が19点余採収された。

石器、硬砂岩の打製石斧片、緑色岩の打製石斧（図版９－２）や、黒曜石の石鏃（第９図－16）が表採であるが１点採集された。



第８図　調査出土遺物実測図(1)　※No.は遺物番号



第９図　調査出土遺物実測図(2)　※No.は遺物番号

ま　と　め

後沢遺跡は、高遠町河南地籍小原に所在する遺跡である。この後沢遺跡は、三峰川扇状地の範囲内にあり、その扇状地の底部には変成岩の基盤岩がある。その上に三峰川が運んで来た砂レキ層が堆積し、更にその上に大沢川が運んできた砂レキ層が再扇状地を形成している。最終的には御岳のテフラが堆積した扇状地となった。このテフラ層の上部には8000年前の「アカホヤ」が含まれている。今回発見された縄文早期の押型紋土器はこの時期に当たっており、このことから高遠町では、現在のところ最古の遺跡に位置付けられることになる。しかし、今回の調査からは縄文前期の遺物はついに発見することができなかった。

出土遺物からみると縄文中期前葉の土器片が発見され、時代は移り、縄文中期後葉の加曽利E式のⅢ型式からⅣ型式の遺物が検出された。また、縄文後期に対比される、堀之内式と考えられる土器も検出されている。本遺跡周辺には古城・北垣外・竹垣外・上垣外など縄文後期・弥生・古墳時代の遺跡が知られているが、それらの遺物は今回の調査では発見することができなかった。幸いなことに本遺跡からは平安時代の灰釉陶器が検出され、この地に平安時代の集落が存在していたことを如実に物語ってくれる貴重な資料となった。

また、この地域には古くからの伝説に、源平の戦に敗れた平維盛が熊野から落ちてきてこの地に落付いた。その時熊野社を勧請したという伝説が今日まで伝えられている。平安時代には神仏混交の熊野信仰が盛んであったので、小原の地に伝えられている熊野信仰は事実であったものと考えられる。その後鎌倉時代になると「吾妻鏡」に記されているように「小松原郷」の名が知られる。この郷の地頭がおそらく諏訪氏系であったので、熊野権現系の神社が諏訪明神系に変ったものと考えられる。（友　野　良　一）

あ と が き

この調査から報告書の発刊にあたり、調査団長の友野良一先生には、多忙であるにもかかわらず遠く宮田村よりご足労をいただき、調査期間は短かったものの、陣頭指揮をとる傍ら、休憩時間を惜しんで作業員の皆さんと学習会を持っていただいたり、進んで歴史調査の大切さやおもしろさを変わらず教えていただきました。

今回正直に申し上げて、開田されている沢沿いの小さな水田であり、遺物はともかく遺構まで発見できるとは考えておりませんでした。調査の成果として前記のように大きな成果が得られたのも、この調査に参加していただきました作業員の皆さん、地元をはじめご協力をいただいた方々のご努力の賜物と、この場をお借りして感謝申し上げ、お礼の言葉といたします。

高遠町教育委員会
教育次長　田　中　幸　人（平成６年度）

《発掘調査に参加された方々》　（順不同・敬称略）

伊　東　　晁	藤　沢　国　夫	小　松　昭　三	伊　東　岩　雄
山　崎　　勉	矢　沢　　実	原　　健二郎	加　藤　俊　幸
小　松　博　康	丸　山　まゆみ	奥　田　静　子	保　科　時　子

参　考　文　献

高遠町誌刊行会　1979　「高遠町誌　下巻」（自然・現代・民俗）
高透町誌刊行会　1983　「高遠町誌　上巻」（歴史）
高遠町教育委員会　1990　「原勝間遺跡」
高遠町教育委員会　1991　「高遠町小字マップ」
高遠町教育委員会　1993　「金井原遺跡」

写真図版

図版 1

1

2

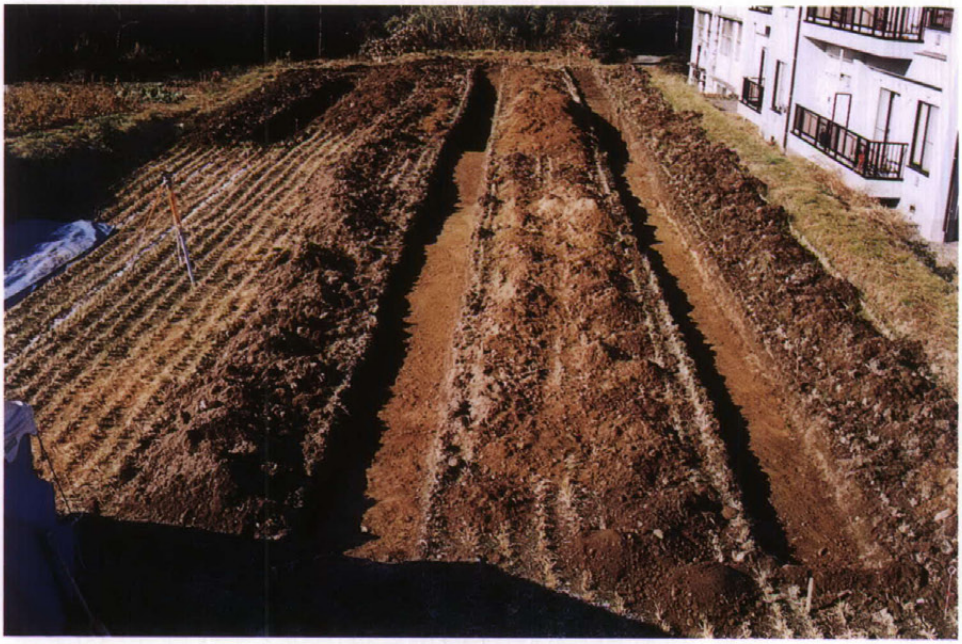
3

発掘調査状況(1)　　1．発掘調査前の調査地　　2．調査にあたってのあいさつ
3．調査中の状況（第2トレンチ）

図版 2

1

2



3

発掘調査状況(2)　　1．2．調査中の状況（第2・第3トレンチ）
3．トレンチ調査状況

図版 3

1

2

3

トレンチ調査出土土坑調査状況

1．第1号土坑　2．第2号土坑　3．第3号土坑

図版 4

1

2

3

1．2．再調査中の状況

3．第1～3号土坑(竪穴址)全容出土状況（手前が第1号竪穴址）

図版 5

遺構出土状況
第１号竪穴址

1

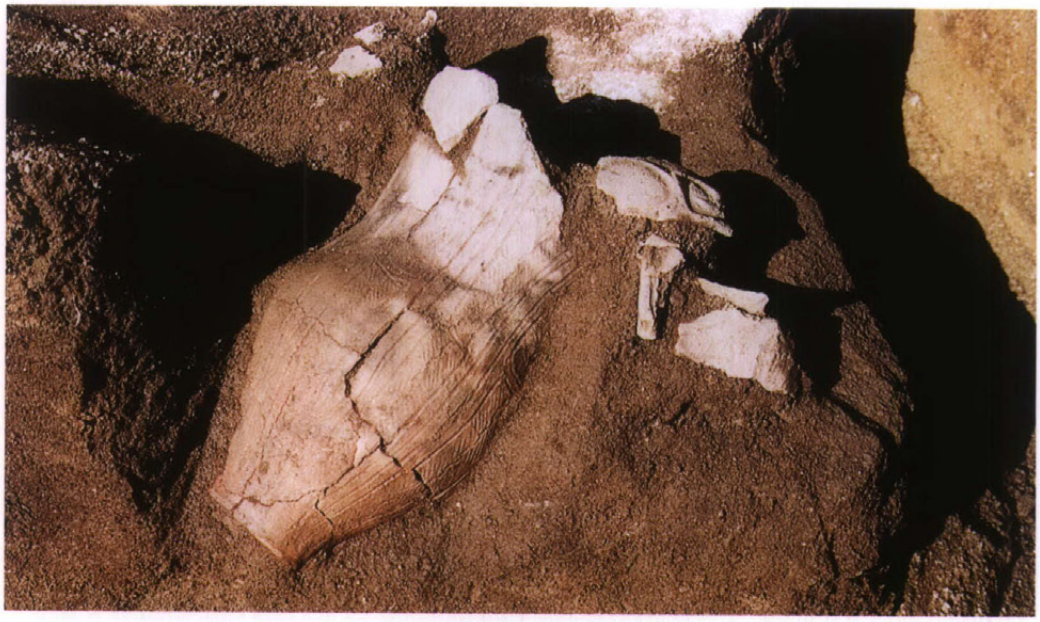
遺構山土状況
第２号竪穴址

2

遺物出土状況
第３号竪穴址

3

図版 6



1

2

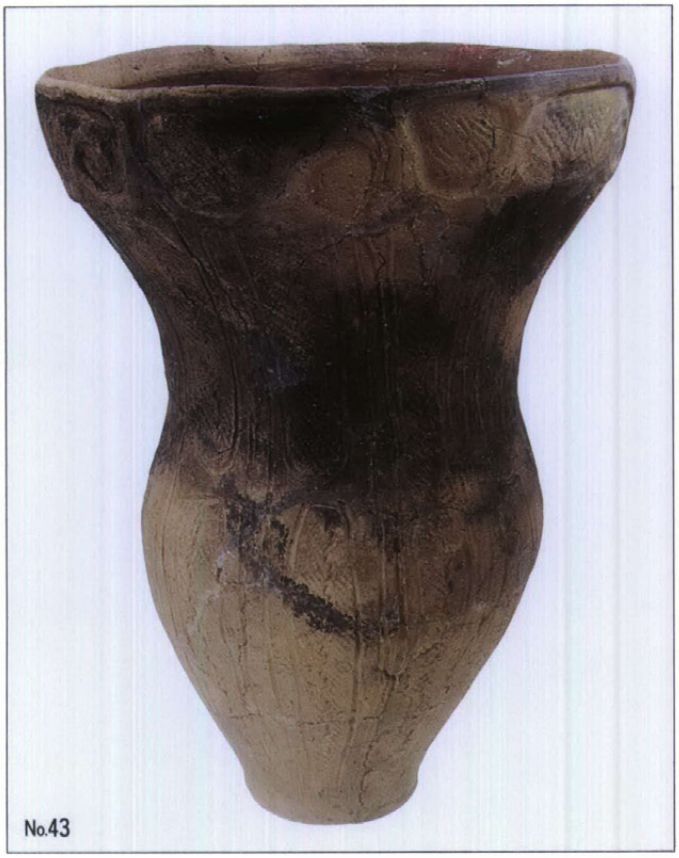
3

4

1～3．遺物出土状況　　4．発掘調査に参加された方々

（遺物　1．No.43　　2．No.26　　3．No.29）

図版 7



1

2

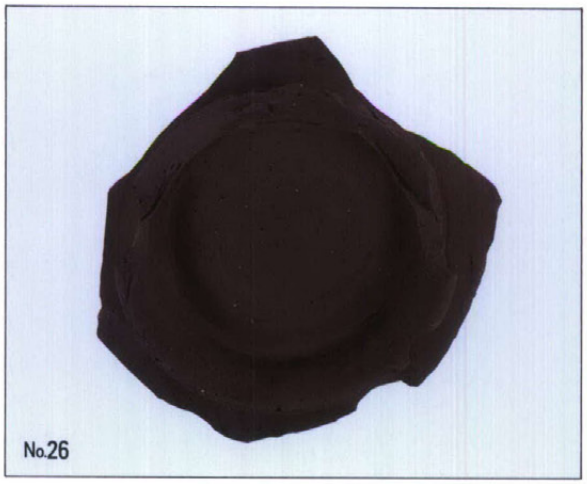
調査出土遺物(1)　※No.は遺物番号

図版 8

1

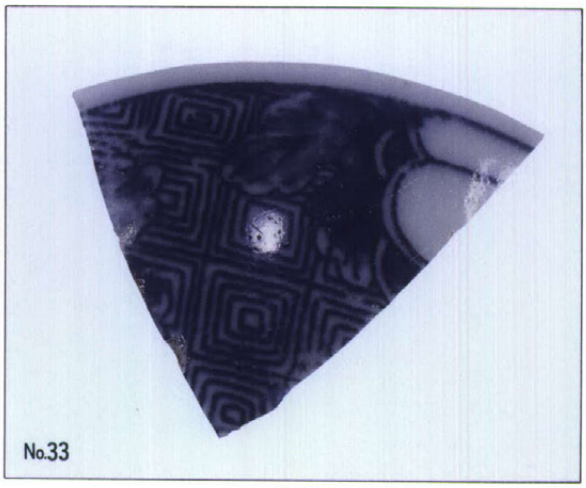
2

3



4

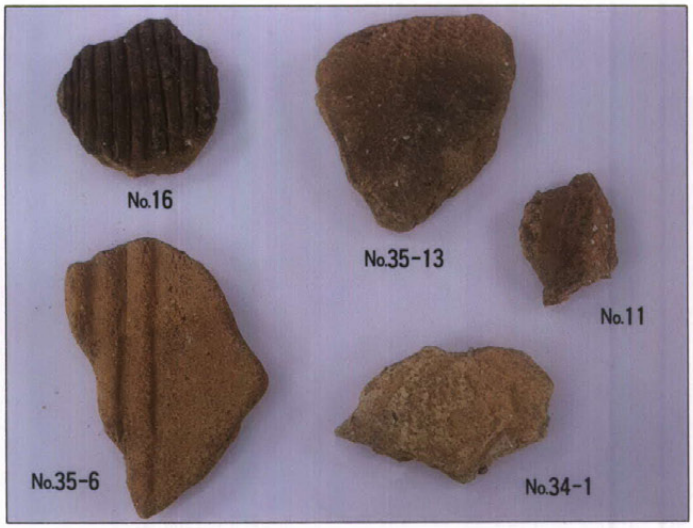
5



6

調査出土遺物(2)　※No.は遺物番号

図版 9



1

2

表採

3

表採

報告書抄録

ふりがな	うしろざわ　いせき
書名	後沢遺跡 II
副書名	県立高遠高等学校教員住宅建設のための用地造成事業
巻次	
シリーズ名	埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
シリーズ番号	後沢 II
編著者名	友野良一
編集機関	高遠町教育委員会
所在地	〒396-02 長野県上伊那郡高遠町大字西高遠1806番地　☎0265-94-2557
発行年月日	西暦１９９６年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
うしろざわいせき 後沢遺跡	たかとおまちおおあざおばら 高遠町大字小原 うしろざわ 後沢 760－１番地	３８５		３５° ４９′	138° 3′	平成6年 11月14日 ～ 平成7年 1月26日	２５０	県立高遠高等学校教員住宅建設のための用地造成事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
後沢		縄文 弥生 平安	不正楕円形の竪穴式遺構３基	深鉢式土器 山形押型紋土器片	深鉢式土器は加曽利Ｅ式Ⅲ型式で、縄文時代中期後葉のもの 山形押型紋土器片は縄文時代早期のもの

県立高遠高等学校教員住宅
建設のための用地造成事業

後沢遺跡 II

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成８年３月

● 編集・発行／高遠町教育委員会
● 印刷・製本／株式会社オノウエ印刷
〒392 諏訪市中洲586